

連体修飾構造の習得における「の」の過剰使用：格 助詞仮説と準体助詞仮説

小山, 悟
九州大学留学生センター：助教授

<https://doi.org/10.15017/4776946>

出版情報：九州大学留学生センター紀要. 15, pp. 41-50, 2007-02. 九州大学留学生センター
バージョン：
権利関係：



連体修飾構造の習得における「の」の過剰使用

Overuse of 'No' in a process on the acquisition of modified noun structure

— 格助詞仮説と準体助詞仮説 —

小 山 悟*

要 旨

本稿は、連体修飾構造の習得過程に見られる助詞「の」の過剰使用について、母語の習得研究で提起されている2つの主要な仮説 - 格助詞仮説と準体助詞仮説 - が、成人の第二言語習得の説明としても有効なのかどうかを、発話コーパスの分析を通して検証した。その結果、準体助詞は「の」の過剰使用よりもかなり遅れて出現すること、準体助詞の出現によって「の」の過剰使用の頻度が高まることもなかったことから、準体助詞仮説は成人第二言語学習者による誤用の説明としては必ずしも有効ではないことが明らかになった。しかし、母語と第二言語で連体修飾構造の習得順序が一致していることは事実であり、この点については文法の習得を「規則」としての習得と「語彙」としての習得に分けて考えることを提案した。

【キーワード】

連体修飾構造の習得、「の」の過剰使用、格助詞仮説、準体助詞仮説、習得環境

1. はじめに

連体修飾構造の習得過程で生じる助詞「の」の過剰使用については、旧来、母語の影響による中国語話者の典型的な誤用であるとする見方が一般的であった。しかし、最近では：

「の」の過剰使用が中国語話者だけでなく、英語や韓国語、タイ語など、他の言語を母語とする学習者の発話にも見られる。(白畑, 1993a, 1993b; 迫田, 1999; 奥野, 2000)

「*青い^①ブーバー」や「*うさちゃんが食べた^②ニンジン」といった発話が母語の習得過程においても観察される。(Clancy, 1985)

成人学習者による連体修飾構造の習得順序は、幼児のそれと非常によく似ている。(小山, 2004)

などの理由から、これを母語の干渉による誤り

ではなく、第二言語習得論で言うところの、いわゆる「発達上の誤り」であるとする説がかなり有力となってきている。では、なぜそのような誤用が生じるのか。本稿では、幼児による「の」の過剰使用の説明として提起された2つの主要な仮説、格助詞仮説と準体助詞仮説の観点から、成人学習者の誤用について検証してみたい。

2. 先行研究

2 - 1 連体修飾構造の習得順序

これまでの研究で、幼児は図1のような五つの段階を経て連体修飾構造を習得することが明らかになっている。

第1段階は、幼児が二つの語彙をただ順番に並べることによって「修飾 + 被修飾」の関係を表そうとする時期、第2段階は助詞「の」が出

*九州大学留学生センター助教授



図1 日本語を母語とする幼児の連体修飾構造の習得過程 (小山2004)

現するものの、名詞だけでなく形容詞の後にも出現し、結果、「形容詞+の+名詞」という誤用形を生み出してしまう時期である。さらに第3段階では動詞の後にも「の」が出現するようになるが、その後、第4段階になってようやく形容詞の誤用形が消え、続いて第5段階で動詞の誤用形が消えることで連体修飾構造の習得が完了する。

この一旦「の」の過剰使用の状態を経た後、誤用形が消え正用形だけが残るという習得の道筋は、韓国人児童の発話を分析した縦断研究(白畑 1993a)でも、成人タイ語母語話者とマレー語母語話者の発話を分析した別の縦断研究(白畑 1993b)でも確認されており、普遍性の高いものであると考えられる。

2 - 2 格助詞仮説と準体助詞仮説

この習得順序が、母語以外の何らかの心理的なメカニズムの働きによって生じたものであることは容易に推察されるところであるが、その具体的な説明として提起されている仮説のひとつに「格助詞仮説」がある。

格助詞仮説とは、形容詞や動詞の後に挿入される unnecessary 「の」は、名詞と名詞の間に挿入される格助詞「の」が過剰般化されたものであ

るとする説である。この説に従えば、学習者は習得の第二段階で修飾語と非修飾語とを繋ぐ助詞「の」の存在に気がつくものの、それが必要なのは名詞の後だけであるということには気付かず、形容詞や動詞の後にも unnecessary 「の」を挿入してしまうということになる。また、幼児の発話にわずかながら観察される「この[□]まままで食べる」のような連体詞に「の」を付けてしまう誤用もこの格助詞仮説の妥当性を裏付けている。

その一方で、形容詞や動詞を体言化する準体助詞、つまり「赤い[□]の[□]がいい」の「の」が原因となって誤用が生じるとする説もあり、これを「準体助詞仮説」と言う。この仮説の根拠となっているのは、幼児は修飾語として発話した形容詞の全てに「の」を過剰使用しているわけではないという点である。格助詞仮説が主張するように、「名詞+の+名詞」という形式に引きずられ、修飾語と被修飾語の間には全て「の」を挿入すると理解しているのだとすれば、発話された全ての形容詞に「の」が過剰使用されてよいはずである。しかし、実際には一部の特定の形容詞に限って「の」が過剰使用されることが報告されている。

正高(1997)の研究によると、調査の対象と

なった幼児の発話中に修飾語として正しく発話された25種類の形容詞のうち、「形容詞＋名詞」という正用形でのみ使われたものが11種類（A類）、「形容詞＋名詞」という正用形で使われると同時に、準体助詞の「の」をつけた形でも使用されたものが4種類（B類）、「形容詞＋名詞」という正用形で使われただけでなく、準体助詞をつけた形でも、不必要な助詞「の」を付けた形でも使用されたものが10種類（C類）あったという（表2）。つまり、「形容詞＋の＋名詞」という誤用形で使用された形容詞は、全て一度は「形容詞＋準体助詞」という形で使用されており、「形容詞＋準体助詞」という形で使用されたことのない形容詞には「の」の過剰使用は一度も生じていないということである。

表2 修飾語として発話された形容詞

	形φ名	形の	*形の名
A(11種)	○	×	×
B(4種)	○	○	×
C(10種)	○	○	○

正高（1997）をもとに筆者が作成

この結果から導き出されるひとつの仮説は、幼児は一部の形容詞について「形容詞＋準体助詞」をひとつのセットとして記憶しており、それを形容詞が名詞を修飾する際にも適用してしまうため、「形容詞＋の＋名詞」という誤った形式で発話してしまうのではないかというものである。実際、正高（1997：148）の調査では準体助詞の出現は「の」の過剰使用よりも1ヶ月早かったことが明らかになっている。

3. 研究課題

本稿では、この二つの仮説について成人第二

言語学習者の発話データをもとに検証する。幼児の母語習得と成人の第二言語習得で互によく似た習得順序が観察されたということは、連体修飾構造の習得には母語か第二言語か、あるいは幼児か成人かに関係なく作用するなんらかの心理的なメカニズムがあるということである。それを以下の3点から探ってみたい。

1. 成人第二言語学習者の発話に準体助詞が出現するのはいつか。

幼児と同様、「の」の過剰使用が起こる前に出現すれば、準体助詞を支持する有力な根拠となりうるであろう。

2. 準体助詞の出現によって、助詞「の」が過剰使用される頻度が高まるのか。

仮に「の」の過剰使用より準体助詞の出現の方が遅かったとしても、準体助詞の出現で「の」が過剰使用される頻度が高まるのであれば、準体助詞仮説を条件付きで支持する根拠に十分なりうるであろう。

3. 準体助詞の使用について学習者の発話と、学習者が受けるインプットとの間に何らかの関連があるのか。

仮に、準体助詞の出現が「の」の過剰使用に影響を与えないと判断された場合、それは成人学習者がインプットの中に含まれる準体助詞の存在に気付かないからなのか、それともインプット自体に準体助詞がほとんど含まれていないからなのか。後者であれば、幼児と成人の間には言語面で習得環境の違いがあることになる。

4. 調査の方法

調査にはKYコーパスを用いた²。これはOPIによってレベル分けされた成人第二言語学習者の発話データを文字化したもので、フロッピーには中国語、韓国語、英語の3つの言語を

母語とする学習者の発話データが、それぞれ30名分ずつテキスト形式で納められている。レベル別の内訳は初級5名、中級10名、上級10名、超級5名となっているが、初級から上級までの各レベルはさらに2～3レベルに下位分類されており、母語話者群によって人数的な偏りがある(表3)。そこで、本研究ではNH(初級上)からS(超級)までは各母語話者群からランダムに2名ずつ選び、NL(初級下)とNM(初級中)レベルに関しては9名全員のデータを分析することとした。

表3 分析したデータ

	中	韓	英	分析
初級下 (NL)	1	2	1	9
初級中 (NM)	2	1	2	
初級上 (NH)	2	2	2	2×3
中級下 (IL)	3	2	4	2×3
中級中 (IM)	4	6	4	2×3
中級上 (IH)	3	2	2	2×3
上級 (A)	3	6	3	2×3
上級上 (AH)	7	4	7	2×3
超級 (S)	5	5	5	2×3

5. 結 果

5 - 1 横断データに見る習得順序

調査の結果は表4のとおりである。これを見ると、成人第二言語学習者は名詞の後に助詞「の」を挿入するところから連体修飾構造の習得を始めており、母語の習得で言う第一段階、すなわち修飾語と被修飾語をただ順番に並べるだけの時期が見られないことがわかる。

これには少なくとも二つの可能性が考えられるであろう。ひとつは、インタビューを行った時点でNL(初級下)とNM(初級中)の被験

者全員が既に第一段階から第二段階への移行を果たしていたという可能性である。もうひとつは、成人第二言語学習者の場合には、習得の第一段階がそもそも存在しない、或いは存在しても極めて短期間であるという可能性である。仮に後者であるとすれば、教室環境で文法規則を明示的に学習したことにより、学習者に助詞「の」の存在が強く意識づけられたことが原因ではないかと考えられる。³ 意識的な文法の学習は習得の「順序」には影響を与えないというのが最近の定説ではあるが、一方で習得の速度を速める効果があることも確認されており⁴、また、習得の初期段階においては単純な文法規則に限って意識的な文法教授の効果が現れるという研究結果も報告されているからである⁵。ただ、その場合、なぜNH(初級上)になって、急に「の」が欠落するようになるのかという疑問が生じる。これについても、NL(初級下)やNM(初級中)では文法的な正確さに向けられていた学習者の注意が、コミュニケーション能力の発達に伴い徐々に伝達内容の方にシフトしていった、つまり、文法的な正確さに注意が向けられなくなったという説明や、もともと「の」の欠落は極めて頻度の低い誤用であり、NL(初級下)やNM(初級中)ではたまたま表出しなかっただけであるという説明も可能であるが、いずれも推測の域を出ない。ここでは、成人第二言語学習者は習得のかなり早い段階から名詞の正用形(=「名詞+の+名詞」)を表出できるようになると指摘するに留めたい。

もうひとつ興味深い点は、動詞の正用形(=「動詞+名詞」)が、イ形容詞やナ形容詞の正用形よりも先に現れているという点である。これは幼児の母語習得に見られる「名詞→形容詞→動詞」という習得順序とは異なる結果である。ただ、NL(初級下)とNM(初級中)でそれ

ぞれ1回ずつ現れた正用はいずれも韓国語話者によるものであり(表6)、しかもそのうちの1回は教師の発話を単に繰り返したただけであった。

T: ええ、日本に来たことはありますか

S: 来たこと (KNL01)

また、残りのもう1例も「～したφことがない」という「文型」で表出されていることから、「動詞の正用形は名詞の正用形と同時期に習得

される」と結論付けるのには少し無理があるように思われる。なお、中国語話者の発話に動詞の正用形が出現するのは初級の後半でイ形容詞やナ形容詞と同時期(表5)、英語話者の場合にはイ形容詞やナ形容詞の正用形よりもやや遅れて出現すること(表7)を考えると、動詞の正用形の習得は速くても初級の後半辺りからと考えた方がよいように思われる。

表4 K Yコーパスに出現した連体修飾構造と準体助詞⁶

品詞	発話形式	正誤	初級			中級			上級		超級
			NL	NM	NH	IL	IM	IH	A	AH	S
名詞	+ の	○	5	31	76	157	246	374	405	433	448
	φ	×			4	11	16	3	4	1	0
イ形容詞	φ	○		4	7	28	20	46	55	68	62
	+ の	×		2	4	9	11	5	5	1	0
	+ 準体	○				1	1	1	1	0	2
ナ形容詞	+ な	○		3	4	11	31	25	60	59	63
	+ の	×		1	4	2	11	0	4	5	0
	+ 準体	○						1	0	1	1
動詞	φ	○	1	1	5	34	95	126	122	200	191
	+ の	×			1	4	5	6	0	2	2
	+ 準体	○					12	9	20	22	27

表5 中国語話者のデータ

品詞	発話形式	正誤	初級			中級			上級		超級
			NL	NM	NH	IL	IM	IH	A	AH	S
名詞	+ の	○	3	8	35	58	95	141	192	150	117
	φ	×			1	7	14	3	3	0	0
イ形容詞	φ	○			1	7	6	16	29	20	18
	+ の	×			3	3	9	3	4	1	0
	+ 準体	○					1	0	1	0	1
ナ形容詞	+ な	○			2	2	7	11	26	25	19
	+ の	×			3	0	6	0	4	5	0
	+ 準体	○									
動詞	φ	○			2	4	23	32	37	42	63
	+ の	×			1	0	2	3	0	0	1
	+ 準体	○						3	2	3	5

表 6 韓国語話者のデータ

品詞	発話形式	正誤	初級			中級			上級		超級
			NL	NM	NH	IL	IM	IH	A	AH	S
名詞	+ の	○	2	1	18	47	101	110	108	121	173
	φ	×			1	4	1	0	1	0	0
イ形容詞	φ	○		2	2	4	9	19	10	18	27
	+ の	×				6	0	1	1	0	0
	+ 準体	○						1	0	0	1
ナ形容詞	+ な	○		2	1	4	8	11	16	13	22
	+ の	×				2	1	0	0	0	0
	+ 準体	○									1
動詞	φ	○	1	1	3	18	54	52	55	65	82
	+ の	×				4	3	2	0	1	0
	+ 準体	○					7	5	11	8	17

表 7 英語話者のデータ

品詞	発話形式	正誤	初級			中級			上級		超級
			NL	NM	NH	IL	IM	IH	A	AH	S
名詞	+ の	○		22	23	52	50	123	105	162	158
	φ	×			2	0	1	0	0	1	0
イ形容詞	φ	○		2	4	17	5	11	16	30	17
	+ の	×		2	1	0	2	1	0	0	0
	+ 準体	○				1	0	0	0	0	0
ナ形容詞	+ な	○		1	1	5	16	3	18	21	22
	+ の	×		1	1	0	4	0	0	0	0
	+ 準体	○						1	0	1	0
動詞	φ	○				12	18	42	30	93	46
	+ の	×						1	0	1	1
	+ 準体	○					5	1	7	11	5

5 - 2 準体助詞の出現時期（論点 1）

さて、最初に提示した 3 つの論点のうちのひとつ、準体助詞の出現時期についてであるが、準体助詞が学習者の発話に最初に現れるのは IL（中級下）で、「おもしろい」というイ形容詞に「の」がついた形であった。その後、IM（中級中）で動詞にも「の」がつくようになり、IH（中級上）になるとナ形容詞にも「の」がつくようになる。数的に見ると動詞が一番多く、かなり差があるがイ形容詞が 2 番目、もっとも

少ないのがナ形容詞となっている。動詞が一番多いのは、連体修飾構造を用いた発話の数自体がイ形容詞やナ形容詞よりもずっと多いことから考えて、その比率を反映したものと考えべきであろう。イ形容詞とナ形容詞の違いについては、数自体が少ないので、その理由をここで論じることにはどの程度の意味があるのか、疑問に感じるところであるが、あえて理由を探せば、イ形容詞の場合には末尾にただ「の」を付け加えればよいのに対し、ナ形容詞の場合には名詞

との間に「な」を挿入しなければならず、構造が複雑であるという点が指摘できるであろうか。また、イ形容詞の場合には、連体修飾の誤用形、すなわち「形容詞＋の＋名詞」と同じ形であるため、その影響を受けやすいということも考えられる。いずれにしても、母語習得の場合とは異なり、成人の第二言語習得の場合には準体助詞の出現はかなり遅れるため、「の」の過剰使用を引き起こす直接的な原因とは考えにくい。

5 - 3 準体助詞の影響 (論点 2)

二つ目の論点は、準体助詞「の」の出現によって格助詞「の」が過剰使用される率が高まるのかという点である。仮にもしそうなら、準体助詞が誤用の直接的な原因とはならなくとも、学習者の母語が過程的転移という形で誤用の克服を妨げるのと同様に⁷⁾、準体助詞が「の」の過剰使用に間接的な影響を与えているという可能性が出てくる。しかし、今回のデータではむしろそれとは逆に、形容詞や動詞の後に不必要な「の」を挿入する誤りは、IM (中級中) をピークに減少に転じており、これは準体助詞の出現時期とほぼ一致している。(図 2) 準体助詞の出現と同時期に「の」の過剰使用が減っていく

のであるから、準体助詞が「の」の過剰使用を助長しているとは当然考えられない。

5 - 4 学習者が受けるインプット (論点 3)

最後に、準体助詞の使用に関し、学習者の受けるインプットとの関連があるかどうかについて見ておきたい。図 3 は K Y コーパスの被験者 (学習者) とテスター (教師) の発話に現れた準体助詞の使用頻度の変化を比較したものである。

予想では、ネイティブが準体助詞を頻繁に使うようになるのと同時期、もしくはそれよりやや遅れて、学習者の発話内における準体助詞の出現数も増加すると考えたのであるが、結果は微妙なものであった。図 3 を見ると、学習者が使用する準体助詞の数は IL (中級下) から IM (中級中) にかけてと、IH (中級上) から A (上級) にかけての 2 度急激に高まっているが、その 2 度の急激な伸びを説明できるような変化が教師の発話には見られないことから、残念ながら、両者に因果関係が存在することを示唆する結果とは言えない。

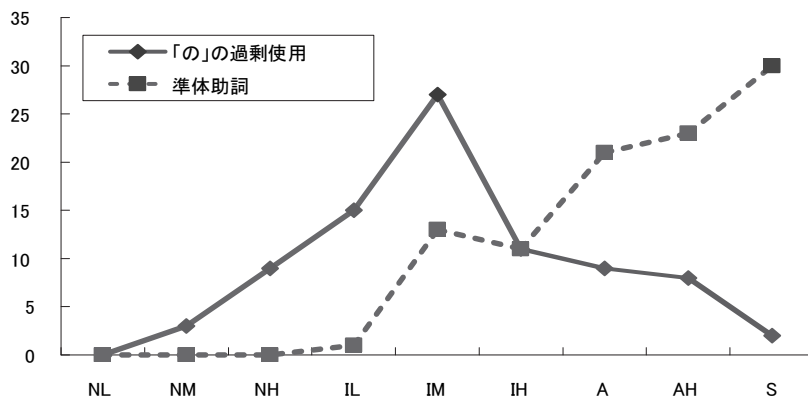


図 2 「の」の過剰使用と準体助詞の使用頻度

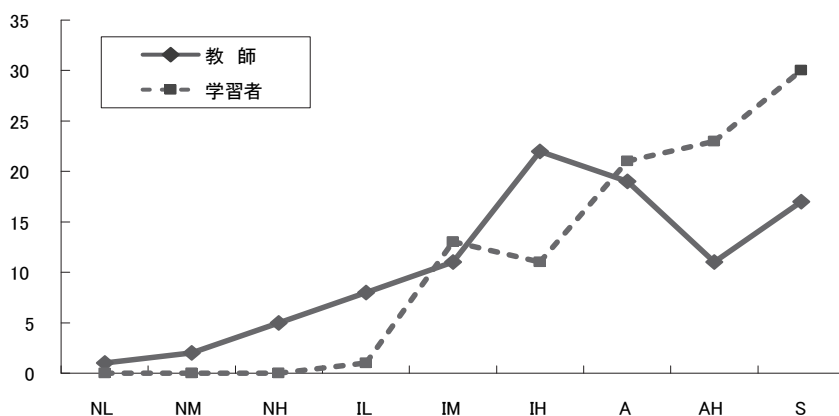


図3 準体助詞の使用頻度 (学習者と教師の発話の比較)

6. 考 察

今回の研究では、連体修飾構造の習得過程において、なぜ「の」が過剰使用されるのかを説明するために、格助詞仮説と準体助詞仮説という2つの仮説について、成人第二言語学習者の発話データをもとに検証した。その結果、以下の理由で、成人の場合には準体助詞仮説は必ずしも有効ではないという結論に至った。

形容詞や動詞に不必要な「の」をつける誤りは、準体助詞が出現するずっと以前から生じていること (論点1)

準体助詞の出現によって「の」の過剰使用が増加することではなく、むしろそれとは逆に減少していたこと (論点2)

しかし、幼児の場合には、格助詞よりも準体助詞の方が先に出現することや、「の」が過剰使用される形容詞とそうではない形容詞が明確に区別されていることなどから、準体助詞仮説を支持する十分な根拠があると考えられる。そこで論点となるのが、幼児の母語習得と成人の第二言語習得に見られるこのような違いを、習得順序における普遍性と矛盾することなく説明

するにはどうすればよいかという点である。本稿では、この点について、格助詞仮説で論じられている助詞の適用規則の段階的な拡張が習得順序を決定づける主要因であり、準体助詞仮説の根拠とされるいくつかの現象を習得順序に「乱れ」を生じさせる副次的な要因であると考えたい。つまり、習得順序は複雑な文法や語彙の規則を、仮説の構築と検証を繰り返しながら、徐々に精緻化していくプロセスを反映したものであり、習得環境の違い、あるいはそれに起因するインプットの違いが習得順序に一時的な乱れを生じさせていると考えるのである。

この仮説の根拠としてひとつ挙げられるのが、迫田 (2002) の提唱する「ユニット形成のストラテジー」である。これは「ある言語項目が前(または後)の語と1つのユニットとして分析しないで固まりのように処理されること」(迫田 2002 : 116) を言い、連体修飾構造の習得でも「もの」や「こと」、「ほう」など、ある特定の名詞句のパターンで誤用が多く出ていることが迫田 (1999) によって指摘されている。また、奥野 (2000) の研究でも、「ような」や「ために」などで、「の」が過剰使用される傾向が強

いと報告されている。

同様の指摘は母語の習得についてもなされている。正高（1997：149-150）によると、幼児による「の」の過剰使用には少なくとも以下の2つの要因が関与しているという。ひとつは、誤用される助詞と本来用いられるべき助詞、あるいは異なる品詞によって構成された修飾語と被修飾語との間に見られる「文法的類似性の要因」。もうひとつは、発達的に先行して現れた特定の「自立語＋助詞」をひとつの固定的なセットとして、そのまま文法関係の異なる発話にも適用する「模倣・機械的適用の要因」である。後者には学習者の置かれた環境が習得に少なからぬ影響を与えていると考えられる。例えば、先に引用した正高の研究で幼児が準体助詞とセットで使っていた10種類（C類）の形容詞であるが、その多くはアカイ、クロイ、オーキイ、チーサイなど、身の回りにある物の色や形状を表す語彙であった。（正高 1997：148）幼児は毎日の生活の中で「赤い^①、かわいいわね」や「大きい^②をちょうだい」などといった発話を繰り返し耳にしており、そのためこれらを一つの語彙として覚えている可能性が考えられる。他方、成人学習者の場合には、相手が初級者であればあるほど、話し手は意味を明確にするために準体助詞や代名詞の使用を避け、できるだけ具体的に話すように心掛けるであろう。当然、インプットを通じて準体助詞の存在に気づく機会は減る。学習者が準体助詞を使うようになるころには、図2に見られるように、「の」の過剰使用がピークを迎え、誤りが徐々に消えて行く時期、すなわち連体修飾構造の習得が最終段階に向かって進み始める時期である。連体修飾構造の習得にはこのような規則としての習得という側面と、語彙としての習得という側面の両面があり、習得順序は前者のプロセスを反映し、

後者は習得環境の影響を受け、特に習得の初期段階においては一時的な「乱れ」を生じさせると考えることはできないだろうか。

7. 結 論

日本語の第二言語習得研究は、最近ようやく記述的研究から、理論・説明の研究にシフトしつつある。アスペクトの習得などではプロトタイプ論を使って習得順序の説明がなされるなど、意欲的な研究が多数行われている。その反面、インプットや習得環境など、学習者を取り巻く外的な要因が習得の順序や速度にどのような影響を与えるのかについては、研究がまだまだ不十分なままである。本研究では、習得には「規則」としての習得と「語彙」としての習得という二面性があり、それが互いに絡み合って習得順序を表出させているのではないかという仮説を立てたが、今後はこれを他の文法要素の習得について調査しながら、検証していきたい。

参考文献

- 奥野由紀子（2001）「日本語学習者の『の』の過剰使用の要因に関する一考察 - 縦断的な発話調査に基づいて - 」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部（文化教育開発関連領域）』50号, pp.187-195.
- 小山 悟（2003）「連体修飾構造の習得における母語の影響について - 過程的転移としての『の』の過剰使用 - 」『日本語教育論集』19号, pp.41-52, 国立国語研究所.
- 迫田久美子（1999）「第二言語学習者による『の』の付加に関する誤用」『第2言語としての日本語の習得に関する総合研究』科学研究費補助金研究成果報告書 pp.327-334.
- 迫田久美子（2002）「日本語教育に生かす第二言語習得研究」アルク.
- 白畑和彦（1993a）「幼児の第2言語としての日本語獲得と『の』の過剰生成 - 韓国人幼児の縦断研究 - 」『日本語教育』81号, pp.104-115.
- 白畑和彦（1993b）「連体修飾構造獲得過程における化

石化現象」『平成5年度日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会 pp.55-59.

正高信男 (1997) 「文法の獲得 2 - 助詞を中心に」, 小林春美・佐々木正人 (編) 『子どもたちの言語獲得』, pp.131-151, 大修館書店.

Clancy, P. (1985) The acquisition of Japanese. In *The Cross Linguistic Study of language Acquisition* (Vol.1), I. D. Slobin (ed.) Lawrence Erlbaum associates publishers. Hillsdale New Jersey, pp.373-524.

Pica, T. (1985) The selective Impact of instruction on second language acquisition, *Applied Linguistics*, 6: 214-222.

Pienemann, M. (1984). Psychological constraints on the teachability of languages. *Studies in Second Language Acquisition*, 6: 186-214.

《注》

1 正高 (1997), p.147.

2 平成8年度～平成10年度文部科学省科学研究費補助金・基盤研究「第2言語としての日本語の習得に関する総合研究」の研究成果の一部として鎌田修・

山内博之両氏によって作成されたコーパスデータである。

3 KYコースでは被験者の学習歴について一切触れられていないが、テスターとの会話の内容からその多くが大学もしくは語学学校での学習歴を有していることがわかる。

4 意識的な文法教授は習得の「速度」を早めることはできても、習得の「順序」を変えることはできないという説で、「教授可能性仮説」(Pienemann, 1984) と言う。

5 Pica (1985)は「意識的な文法教授は単純な文法規則については促進的な効果を持つが、より複雑な規則に関しては規則の過剰適用を引き起こし、あまりに高度で複雑な冠詞のような規則の場合には、文法教授の効果は全く現れない」と述べている。

6 ナ形容詞には「な」を欠落させた誤用もあったが、頻度が非常に少なかったこと (ILで1回、IHで1回、AHで1回) と、他の品詞との比較という理由から、本表には記載しなかった。

7 小山 (2003), p.48.